

# 思功供展画会に出品された一休宗純筆墨梅図

宮 武 慶 之

## はじめに

檜山義慎(担斎／一七四〇 - 一八四二。以下、担斎に統一。)は国学者であり、書画の鑑定にも優れた。担斎と書画を巡っては屋代弘賢(一七五八 - 一八四一)による『参考伊勢物語』では、担斎が弘賢に贈った為家卿筆本が紹介され、丹波亀山藩士松平貞幹(芝陽／一七七六 - 一八二四)による『芝陽漫録』では文化十五年(一八一八)二月二十一日に江戸で芝陽の所蔵した武田信玄消息を担斎が鑑定していることは知られている<sup>(1)</sup>。

担斎についての先行研究では森銃三(一八九五 - 一九八五)が生没年について『忌辰録』以外の資料を挙げ明らかにし<sup>(2)</sup>、担斎の影響により渡邊華山(一七九三 - 一八四一)が書画の鑑定に明るかったことを指摘しているほか、弘賢が幕命を受けた『古今要覧稿』の編纂に担斎も加わっていることを紹介している<sup>(3)</sup>。また森は担斎の交流について華山による『心の掟』を挙げ、谷文晁(一七六三 - 一八四〇)、市河米庵(一七七九 - 一八五八)、立原杏所(一七八六 - 一八四〇)らは「書画の道に深き人なれば常に益あり。交りて楽しむべし」として交流があったことを紹介している<sup>(4)</sup>。

柏崎順子は『一橋論叢(一二五巻三号)』(二〇〇一年)で、水戸藩士であった立原翠軒(一七七四 - 一八二三)の門人であり『逢原記聞』の編者である岡野庄五郎に宛てた文政二年乙卯三月十九日付の書簡を紹介している。消息中、担斎の記述がみられ、これを檜山担斎と同定した上で、その素性が町人の出であり、文政二年当時は浜町に住んでいたことを明らかにした<sup>(5)</sup>。

担斎は絵画に関係する文献でその名が著名である。狩野栄信(伊川院／一七七五 - 一八二八)の次男で、兄を養信(晴川院／一七九六 - 一八四六)とする朝岡興禎(一八〇〇 - 一八五六)による『古画備考』がある。同書については古画備考研究会による『原本『古画備考』のネットワーク』(二〇一三年)の中で、担斎のことを編纂に大きく貢献した人物であると評価している<sup>(6)</sup>。

このほか担斎は狩野山雪(一五九〇 - 一六五一)の長子である狩野永納(一六三一 - 一六九七)による『本朝画史』の遺漏を補った続編として文政二年(一八一九)に『続本朝画史』を刊行した。

天保十年(一八三九)、担斎は永納を顕彰することと自身の古稀(七十賀)を兼ねて江戸の浅草寺山内日音院を会場として思功供展画会(なお本稿では便宜上この名称で統一する)を開催した。この展画会には担斎の知友が、『本朝画史』所載の画家の作品を中心に持

ち寄り展示された。その出品者と作品名を記し、同年秋に刊行されたのが『思功供展画目録』（東京都立中央図書館蔵）である。そこには八十七点の作品名とその出品者が記載される。従来、『思功供展画目録』は美術史家の大口理夫（一九〇九 - 一九四八）により『画説（昭和十五年十月号）』（一九四〇年）で紹介されている<sup>7)</sup>。同目録は当時の所蔵者と作品、および所蔵者と担斎の関係を伺うことができる重要な資料である。しかしながら、大口が指摘するようにその後の研究でも出品者の詳細な検討がなされていない。また担斎の交流についても明らかにされていない。

目録には作品を借用することとなった二点の作品について詳細な記述がある。その二点のうちの一つに前信州守翠溪が持参した室町時代の禅僧一休宗純（一三九四 - 一四八一）による墨梅図がある。しかしながら信州守すなわち信濃守を名乗った武家で号を翠溪とする人物は特定できない。同書によれば翠溪が展覧会に来場したのは白酔叟の告知により来場したと述べられている。白酔叟とは吉村観阿（白酔庵／一七六五 - 一八四八）のことをさし、江戸の町人数寄者で、はじめ松江藩七代藩主松平治郷（不昧／一七五一 - 一八一八）と親しくし、不昧の没後三年を経た文政四年に正式に新発田藩十代藩主溝口直諒（翠濤／一七九九 - 一八五八。以下、翠濤に統一。）のもとに出入りし多くの茶の湯道具を取り次いでいた人物である<sup>8)</sup>。

そこで本稿では思功供展画会に出品された一休筆墨梅図及び担斎と観阿、さらには翠溪と名乗る人物を特定し、展覧会へ出品するまでの経緯を明らかにする。

## 2. 思功供展画会

天保十年五月一日、狩野永納の顕彰と担斎の古稀七十賀を記念し浅草日音院で思功供展画会が開催された。同年秋に作品の出品目録である『思功供展画目録』が発刊された<sup>9)</sup>。

同目録の文末には次のような担斎の跋文がある。

狩野永納翁嘗著本朝画史後世鑒  
画之模範而其功最偉僕年来藏其  
尚影今茲五月朔將備一瓣香聊作  
思功供社中人喜此舉更設僕古稀  
賀筵一併會於淺草寺中日音院諸  
名家各攜画史中所載奇幅惠然肯  
来妙蹟燦然四圍實賞鑒三昧之勝  
縁而近世之盛事也抑亦可謂翁之  
遺德矣頃者刻其目録進呈諸彦因

述来由附卷末

天保歳次己亥中秋日<sup>(1)</sup>

檜山成徳宣慎識

この跋文について既に大口が『画説(昭和十五年十月号)』で述べており引用しておく  
と次のようになる。

本書の編者は幕末の鑑定家として著名な檜山担斎であつて、彼は延宝のむかし狩野永納が本朝画史を著作した功を偉とすること大に切、偶々年来その肖像を襲蔵するを機縁として、天保己亥十年の五月、永納の「思功供」を思ひ立ち、社中の人に計るに、社人は更に担斎の古稀賀筵を設け、浅草寺内日音院に両者を併せ催し、多数の名家画史所載画家の奇幅を携へ来り、盛会を極めた。その際の展画を輯録せるもの、即ち本書であつて、同年、中秋上梓して知友に進呈された<sup>(1)</sup>。

目録には当日の出品者と出品された八十七件が知れる。なお出品者と作品を一覧にしたのが【表1】である。大口は岡村家松庵が出品した室町時代の画家単庵智伝(生没年不詳)による葦鷺図が現存していると指摘している<sup>(2)</sup>。

出品された作品のうち二件については詳細な記述がみられる。その一つは当日会場となった日音院の所蔵する「不動尊影智海画併題」である。展画会当日、終了間近に院主が蔵から数幅の古画を出したところ、その内の一つに不動尊像があり、智海によるものと判明したので出品された。

もう一件の「一休禅師自画墨梅」については『思功供展画目録』に次のような記述がある。

一休禅師自画墨梅

是日前信州翠溪侯園通閣拜禮之次  
被詣本院白醉叟白展画之由因與陪  
者巡覽僕於書香画馥之際始蒙侯青  
盼侯騰中出細小一軸被示拜受披之  
紫野純老師自賛墨梅也幅僅不足二  
寸長四尺許書画共神趣活澆清爽絶

塵若在項墨林可賞真蹟上上想如是  
珍迹非一人可掩觀請揭壁間來會諸  
鑒家悉感賞其高致實可謂一振千古  
之逸興豈啻一日之大快事也耳哉<sup>(13)</sup>

この日、前信州太守である翠溪が浅草寺円通閣を参詣した。白酔叟(吉村観阿)が展画会開催のことを告知していたようで、会場に立ち寄った。担斎はこの時翠溪と初対面であった。翠溪は小さな袋から小さい軸を取り出し担斎に渡した。その軸とは一休宗純による梅の墨画であった。広げてみると寸法は横二寸(約六センチ)、縦四尺(約百二十センチ)。書画ともに出来の良い作品であった。このような良い作品を一人で鑑賞するのもしのびなく、会場の壁に掲げることにした。思功供展画会に参会した多くの愛好家は、作品を激賞した。大昔の興味深い様子を一新した。実に一日の大快事であると述べている。

### 3. 思功供展画会に出品された墨梅図

翠溪なる人物について検討するとき、現在、東京大学史料編纂所が所蔵する『一休禪師賛墨梅記』に注目する<sup>(14)</sup>。同書は翠濤による自筆文書である。その内容は自身が所持した一休による小品の墨梅図について、作品の模写(図1)と賛、落款、印の臨書が翠濤自身によって書かれる。成立年は文末に

安政乙卯初秋望日執筆于清韻堂

とあり、安政二年の秋、すなわち翠濤五十七歳の時と知れる。新発田藩の中屋敷は江戸木挽町にあり、別に幽清館という。ここには茶室等が点在し、翠濤は隠居後、茶の湯を嗜み過ごした。清韻堂とはその居室の一つである。

思考供展画会に翠濤が作品する点について、同書に次のような記述がある。

檜山成徳<sup>贊筆家而有文雅</sup>会古稀賀筵於日音院集画幅時予偶過之勝中出細  
小一軸示主人此則一休和尚之自筆墨梅也此事載在成徳之所記小  
冊子<sup>小冊子者思功  
会展画目錄也</sup>

この作品(図1)が担斎の七十賀古稀を記念し日音院で開催された思功会に出品された作品であり、その目録にも所載されていることが述べられている。また同書には次のような記述がある。

予聞諸鑒家感賞一休画與詩一筆之細小一軸而後愈以為家珍更加  
愛護也今委記其由蓋備遺忘耳

この作品が参会した諸氏から賞賛されたため、翠濤は記録することを目的に本書を書いたことがわかる。

以上の点から、翠溪とは翠濤の誤記載であったことが判明する。

一休による墨梅図が出品された思考供展画会について、溝口家史料のうち『幽清館雜記』（東京大学史料編纂所蔵）に注目する。同書は幽清館での雜記である<sup>(9)</sup>。この雜記は雜記十二卷（ただし第九卷は欠）と『千貫樹記』、『小浦浪記』からなる。これらの筆跡をみると翠濤自身の筆記または近習の家臣による筆録である。同書には次のような記述がある。

天保十丁亥年五月朔日浅草観音参詣之ついで日音院へ立寄書画  
展覽に持寄所の品々を一見す其節胴らん二人たる小かけものを  
取出し会主に見せける其後書画の目録に其題を記して梓に刻之  
同年十月二十八日観阿ふ来る（卷八）<sup>(10)</sup>

当日、翠濤は胴乱（小物入れ）に一休の軸を入れ、持参した。このことから偶然立ち寄ったのではなく、観阿の告知もあって、軸を持参して参会したことがわかる。展画会の目録である『思功供展画目録』は秋頃に完成し、観阿によって同年十月二十八日に翠濤の元へ届けられたことがわかる。

ただ目録で翠溪となっている点については、『一休禅師賛墨梅記』に次のような記述がある。

○天保歳次己亥中秋日檜山成徳宣慎之  
濤

所記思功会展画目録云是日前信州翠溪  
侯園通閣拜禮之次被詣本院白醉叟白展  
画之由因與陪者巡覽僕於書香画馥之際  
始蒙侯青盼侯騰中出細小一軸被示拜受  
披之紫野純老師自賛墨梅也幅僅不足二

四当作三

寸長四尺許書画共神趣活澆清爽絶塵若

在項墨林可賞真蹟上上想如是珍迹非一人可掩觀請揭壁間來會諸鑒家悉感賞其高致實可謂一振千古之逸興豈啻一日之大快事也耳哉

前述の翠溪とは翠濤であり、作品の寸法も長さ四尺ではなく三尺の誤りであったことがわかる。この誤りの部分については詳細な説明が「正誤辯疑」という項目が立てられ、次のように述べられている。

翠濤庵則自壯歲為茶道之号雖世人多知之成德偶誤字也恐遺後惑乎今觀阿伝此意于成德後日謝其誤改字云然不詳果然否也

翠濤庵とは自身が壮年期に茶道の号として名乗ったもので、知る人は多い。成徳(担斎)は偶々誤ったので、誤解のないように観阿に申し伝えた。後日、担斎は謝罪し文字を改めるといっていたが、その後のことはわからないと述べている。

次に作品の内容について詳しくみていきたい。『一休禪師賛墨梅記』には絵賛の模写、寸法、表具、思功供展画会への出品した詳細が述べられる。

一休の賛については翠濤による臨書(図2)が掲載され、賛は

今夜春香若通信多年愁夢一枝風

とある。また署名と印、落款の臨書(図3)も同人によるもので

虚堂七世大燈五代龍寶門客東海純一休老画与詩一筆 一休

とある。同書によると作品の本紙寸法は

長さ全さし二尺八寸巾一寸八分

とあり、長さは縦約八十六センチ、横約五・四センチの小作品である。

この作品は江戸時代初期に活躍した江月宗玩(一五七四 - 一六四三)による墨蹟鑑定の控え書である『墨蹟之写』(崇福寺蔵。「第四十七卷 寛永二十年癸未」)には次のような記述がある。

一 今夜春香若通信 梅之絵  
多年愁夢一枝風 虚堂七世大灯  
五代龍宝門客東海純一休老画与詩一筆 印

□□□□□□

一 春色無高下花枝自長短 宗園(花押)

一休ハカリノ紙内豎式尺九寸二分、横式寸、惣摺紙内豎式尺九寸二分、横七寸三分、春屋ノ奥書ハ台紙ニかり表具、上下茶色緞子、中風帯紺地桐ノより紋金襴、一文字無之。半井瑞庵より来候、一休并春屋手跡見事に候、正筆とハ存候へとも、春屋ノ加筆不審候、所持之主ニ能々□□<sup>(ママ)</sup>申候へと申遣候、七言絶句ノ賛ヲ一ノ句ノケ、其上事外損シ紙ヲ短尺ホド切タテタリ、紙ニ押タル事、何ノ用ニも立ましき也<sup>7)</sup>。

江月の元には半井瑞庵(医師の半井策庵か)が持参したようで、江月は正筆と認めつつも、どちらの作品かは不明であるが春屋の加筆が疑わしいと鑑定している。一休の賛については七言絶句の第一と第二の句を除いていることや、書き損じた紙を短冊のように切って使っていると述べている。賛や一休の作品寸法は『一休禅師賛墨梅記』の記述と合致し、翠濤が思考供展画会に出品した作品と同定され、江戸時代初期に江月の見聞した作品であったことが知れる<sup>8)</sup>。

先述の『一休禅師賛墨梅記』で表具については次のような記述がある。

右表具りんほ巾一分半上下しけ中もえ  
き金紗一文字安楽庵風帯中の切と同じ  
軸象牙翠濤好にて古裂古軸を用る

軸装したとき左右の柱部分を細くした輪補の形式で、幅は一分半であった。上下の裂地は絁、中廻は金紗、一文字が安楽庵で風帯も同じであった。軸先は象牙で、翠濤の好みによって古い裂地や軸を用いて表装されたことがわかる。

#### 4. おわりに

ここでは担斎と観阿の関係について注目する。酒井抱一(一七六一 - 一八二八)による句集『輕挙館句藻』によると、次のような記述がある。

今年七月十三日洛の法雲院より烏丸光廣卿の御像を蘭畹先生に  
たのみうつしもとめて遠忌の心なす。了伴、観阿、担齋など来  
り侍るつる鴨とわきまへかぬる鳥の跡みのりの雲にはらし給へ  
や<sup>(19)</sup>

文政八年七月十三日、観阿は抱一、古筆了伴（一七九〇 - 一八五三）、担齋らとともに  
観阿は烏丸光廣（一五七九 - 一六三八）の法要に参列している。このとき観阿六十一歳、  
担齋五十二歳であり、この時点で交流があったことが確認される。

そこで『思功供展画目録』の出品者をみると

観音影啓書記画 吉村 白醉庵蔵

との記述がみられ、思功供展画会当日、観阿は出品者として参加したことがわかる。氏名  
の表記については従来、東大寺勸学院の寿蔵に没後追加された碑文中、次のような記述が  
ある。

観翁俗称芳村、本吉村也、先考嘗以財徵聘于仙台侯、侯之先君  
有諱吉村公、以吉芳国読同換之云<sup>(20)</sup>

観阿の父が両替商として仙台藩第五代藩主伊達吉村（一六八〇 - 一七五二）に財用で関  
係したため憚って吉村から芳村に改めた。筆者の研究では『日本研究（第五十四集）』  
（二〇一七年）で、天保十三年に吉村と署名していることを明らかにしたが<sup>(21)</sup>、天保十年  
の時点で、すでに吉村と名乗っていたことがわかる。

また『思功供展画目録』の出品者には

芸阿弥画猿猴 白醉庵男 吉村信軸蔵

がいる。この人物は観阿の息子信軸（弥山／生没年不詳）である。

信軸を巡っては法隆寺円明院に寄進した額箱に父観阿、と共に朱漆で署名している。

観阿は室町時代中期から後期にかけて活躍した賢江祥啓（啓書記／生没年不詳）による  
観音像、信軸は室町幕府の同朋衆であった芸阿弥（一四三一 - 一四八五）による猿猴図を  
出品している。担齋を巡る人物の中で観阿と息子信軸の名前が見出せることは、両者が当



時の江戸で鑑定家、もしくは茶人として相当の位置にあった人物と考えられる。

以上のように観阿は思功会へ親子で出品し、翠濤なる人物への告知など、担斎との思功供展画会開催に向け援助していたことが確認できる。

次に観阿と翠濤の交流については文政三年、観阿が溝口家の所蔵品を鑑定したことで、翌年文政四年から正式に出入りするようになった<sup>(22)</sup>。その後も溝口家を訪れており、茶会への参会や道具の取り次ぎを行っていた。この当時の翠濤は藩主の時期であった。翠濤は天保九年に隠居する。同年八月五日、隠居の際の献上品として次代の藩主である息子、直溥（一八一九 - 一八七四）より將軍家に、太刀、馬代、巻物を献上している。直溥が二十歳で家督を継いだため、翠濤は大侯として、新発田藩十一代藩主直溥の後見役となり藩政に関与した。

ところで『新発田市史（上巻）』には翠濤が嘉永四亥年（一八五一）一月に茶会出席を藩に届け出た書面が記載される。その書面には次のような記述がある。

観<sup>(阿)</sup>河方へ茶に参度存候。昨年ハ見合候様申候得共、もはや年  
改り、所々へも出候故よろしかるべく候哉。昨年は春より参候  
旨申出置候へとも、尚相談並びに左之面々へも迫々参り度、隠居  
之身分参候義ハ不苦と存候得共、一通相談いたし候<sup>(23)</sup>。

同書では亥を嘉永四年としているが、文中に「隠居之身分参候」とあり、翠濤は天保九年に隠居し、直近で亥の年は天保十年に該当する。同書に観河とする人物の記載があるが、翠濤との交流を考えた場合、観阿の誤記載であると判断される。観阿は嘉永元年（一八四八）に没しており、本書が書かれたのが嘉永四年であるとは考えられない。以上の点から本届は天保十年のものと判断される。

文書の記述に注目してみると、天保九年、翠濤は観阿の茶会に参会することを見合わせていたが、翌年、隠居したこともあって観阿の茶会へ参会することを藩に届け出ている。この茶会について考えるとき、近世の茶道史研究者である高橋義雄（箒庵／一八六一 - 一九三七）が所持した「御本耳兔香炉」の箱墨書に注目したい。箱には次のような墨書がある。

翠濤尊君草廬に初めて御入りの節、床に飾り置き候を御所望に  
て進献す、天保十年亥中春七十五翁 白醉庵観阿<sup>(24)</sup>

天保十年仲春に初めて浅草田原町の白醉庵に参会した時、茶席に飾ってあった香炉を翠

濤が所望し、観阿は献上している。すなわちこの茶会は、前年、藩に届けを出した茶会であると判断される。このことから同年五月一日に開催された思功供展画会への翠濤が参加したのは隠居後の早々の外出であることがわかる。この時翠濤が「御本兔耳香炉」を所望したため観阿は献上した。この献上は隠居の記念であったと推測される。

またこのような交流の延長上で翠濤が担斎との交流に発展したものと結論することができる。

#### 謝辞

調査にご協力いただきました東京大学史料編纂所、新発田市立歴史図書館、東京都立中央図書館、同志社大学今出川図書館に深謝申し上げます。

#### 付記

宮武慶之「近世江戸時代後期の美術品と移動に関する研究-溝口家を起点に-」、平成二十九年度、および平成三十年度高梨学術奨励基金・若手研究助成(美術史)

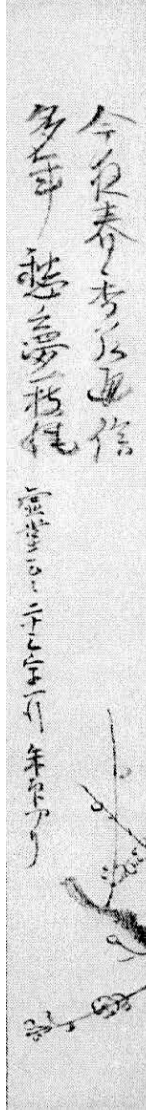


図1 翠濤による一休宗純筆「墨梅図」の模写  
 (『一休禅師賛墨梅記』より転載)



図2 翠濤による一休宗純筆「墨梅図」の臨書  
 (『一休禅師賛墨梅記』より転載)

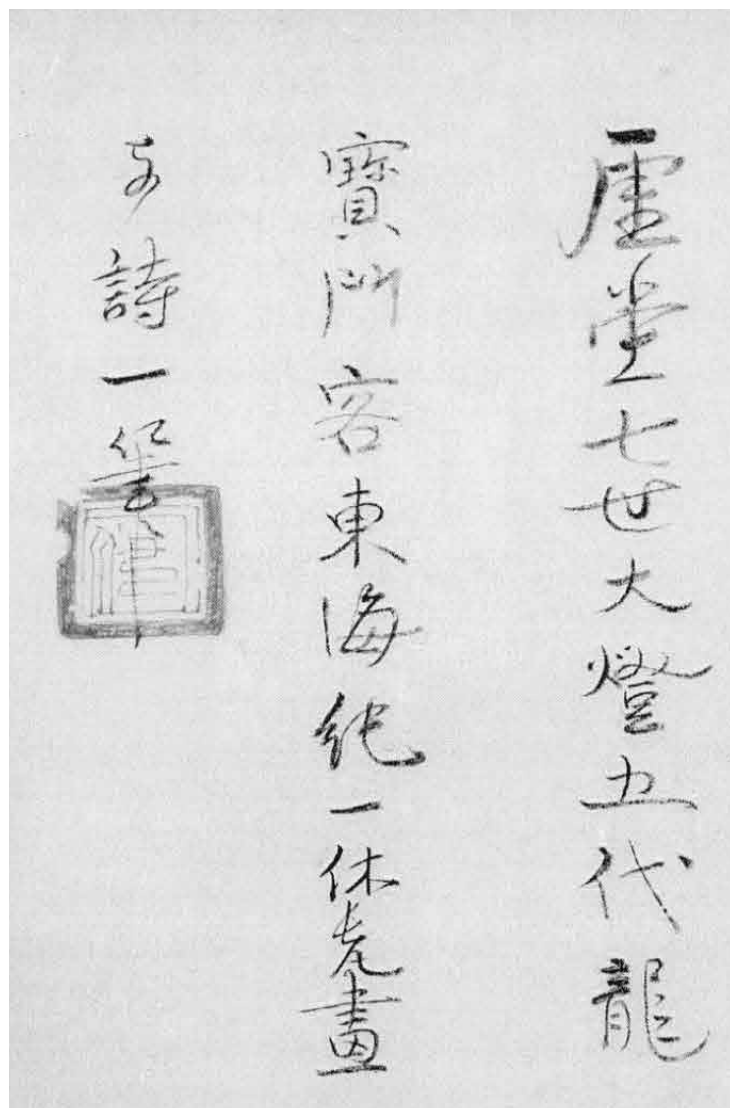


図3 翠濤による一休宗純筆「墨梅図」の落款の臨書と印の模写  
（『一休禅師賛墨梅記』より転載）

表1 『思功供展画田録』にみる出品者と作品  
 (表の作成にあたっては東京都立中央図書館本を底本とした。)

番号	作品名	目録の表記/通称名	原文表記の所蔵者/氏名
1	愛染明王像	弘法大師	角田
2	弘法大師像	真如親王	墨田 滄然齋
3	地藏尊像	巨勢金岡	同
4	不動明王像	巨勢廣貴	吉田家 元柳橋 豊華齋
5	藤原元真像	後鳥羽院	西村 菴庵
6	観音大士像	宅磨栄賀	谷 露山楼/谷文晁
7	世尊山像 寶寧一山	可翁	中村 榛軒
8	山水	可翁	吉川家 下谷 友石齋
9	鉄拐	寒殿司	佐竹家 書禮園/佐竹義路
10	一之画観音影	如慶(櫻)/住吉如慶	住吉家
11	文殊影	如慶(櫻)/住吉如慶	水野家 蔵真堂
12	柳(柿か)本像 寶調阿	豪信/藤原豪信	九段坂 賜慶堂/新昌正路
13	墨浦菊	愚庵	東條 來清堂
14	墨浦菊婢	愚庵	(記載なし)
15	雨竹	玉腕子/玉腕榮芳	池田 自然庵/池田孤郎
16	観音影	兆殿司	九段坂 賜慶堂/新昌正路
17	観音影	勝定院義持/定利義持	松本 目寝齋/松本安右衛門幸彦
18	團扇図	義持/良和義持	守村 隱崎社
19	梅	土佐廣周	川口 季辞亭
20	山水	周文/天宮周文	上田
21	神農像 一休和尚賛	曾我蛇足	小島家 宝素堂所携 或昌医家
22	琴葉書画 双幅	曾我蛇足	狩野家 木挽町 画院
23	世尊見足図 一休和尚賛	采書(或云蛇足名)	堅川 實信亭
24	観音大士	雪舟/雪舟等楊	西福寺 唯々齋
25	楼阁山水	雪舟/雪舟等楊	坂家 葱花庵
26	墨燕子花	雪舟/雪舟等楊	村林 萬露亭
27	王像牧羊図	狩野祐清	鍛冶橋 狩野家
28	葦鷺	単庵/単庵碧伝	岡村家 松庵
29	松鶴	細川久之	松村 鳴々亭
30	猿猴	芸阿弥	白餅庵男 吉村信輔/吉村弥山
31	布袋	洞文/土岐洞文	谷村 即照庵/谷村嘉順
32	李安忠画騎	宗栗(櫻)/小栗宗栗	九段坂 松岡元貞
33	雲龍	奈良法眼鑑賢	半井家 環研堀 牧羊軒/興医師 半井家
34	(記載なし)	奈良法眼鑑賢	(記載なし)
35	台子柱図	相阿弥	本多家 希閑庵/本多左京
36	観音影	啓書記/賢江祥啓	吉村 白餅庵/吉村總阿
37	山水	啓書記/賢江祥啓	九段坂 新井寛
38	山水	啓書記/賢江祥啓	鈴木 松菊荘
39	山水	周耕	秋田藩 忍堂
40	仙女 双幅	照隣	板倉 庶交 花月庵
41	達磨大師像	秋月/秋巨等觀	中橋 狩野家
42	晚荷翡翠	秋月/秋巨等觀	守村 緑叢園
43	小禽 双幅	楊月	落合 桐生軒

番号	作品名	目録の表記／通称名	原文表記の所蔵者／氏名
44	神農像	雪村／雪村周継	余語家 蔵脩庵
45	世尊文殊普賢 三尊三幅一対	雪村／雪村周継	中村 啓室 柳下庵
46	竹雀	雪村／雪村周継	鈴木 游心斎
47	山水	玄照居士	那須家 妻々斎
48	寿老人	良富	秋田藩 田代 古庵
49	山水	曾我紹仙	川上一指亭／川上宗寿
50	羅漢	即梅	森津 碧梧軒
51	圖南像	景種／丘部景種	水野家 蔵真堂
52	文殊影	雪津	田代
53	観月図	月松	九段坂 松村則貞
54	山水	長柳斎	郡司 静々斎
55	柳燕	狩野玉榮	小瀧家
56	花鳥(蒼色)	狩野玉榮	坂家 翠花庵
57	舜耕図	蕙精	築地 狩野家
58	布袋	山田道安	萩原家 曹園
59	鍾馗	山田道安	清水 翠竹窓
60	菅神像	江北元忠	菅田 可庵／豊多武清
61	神農像	長谷川信春	菅原 故道斎嗣 縁池堂
62	枯木鴨	海保友松／海北友松	金子 生翠斎
63	猿猴	狩野孝信	福居 縁外斎
64	雪中東坡	狩野山楽	石坂家 芋斎 芋齋か／石坂宗哲
65	蘭亭 丈山賛	狩野山楽	高木 蘭臺
66	鶏	狩野山楽	井上 歌堂／井上文雄
67	馬頭観音影	狩野探幽	本所 竹裏軒
68	観音影	狩野探幽	静庵
69	雪舟画十六羅漢	狩野探幽(模)	呉服街 洗心庵
70	五聖三賢像	狩野探幽	大橋 權真堂／大橋知良
71	達磨大師像	狩野探幽	渡邊
72	朝日	狩野探幽	橋場 福巖楼
73	梅月	狩野探幽	奥澤 祥節堂
74	雷神	狩野探幽	藤合 櫃石庵
75	曳船図	狩野探幽	駿河台 狩野家
76	秋霧山水	狩野探幽	染谷 夕隱堂
77	鍾馗	雪舟／雪舟等楊	杉村 故三齋軒嗣 竹軒
78	雪柳	狩野探幽	藤田 無雪庵／藤田真一
79	柿本神影	近衛信尹	田川 駐齋亭／駐齋亭字左衛門
80	羣鷺	狩野家信	篠原
81	中夜月 左右鳥 三幅一対	雲谷等益	古藤 養山 松雪斎
82	福祿壽	雪漢	濱名 睡仙堂／浜名政賢
83	山水	雪山	野々山 緞山 染々斎／野々山緞山
84	維摩	狩野永納	屋代家 恩頼館／屋代忠實
85	蓮菜山図	狩野永納	池田 松石居／池田松石
86	墨梅	一休神師	前信州翠溪／溝口翠瀾
87	不動尊影	智海	日指院

## 註

- (1) 平野満「『芝陽漫録』とその著者松平芝陽」『明治大学図書館紀要』第二巻、明治大学図書館、一九九八年、二八六頁。
- (2) 森銑三『檜山担斎』中村幸彦編『森銑三著作集』続編第三巻、中央公論社、一九九三年、一一三-一一五頁。
- (3) 森銑三『渡邊華山』中村幸彦編『森銑三著作集』第六巻、中央公論社、一九九四年、九二頁。
- (4) 森銑三『谷文晁の研究』中村幸彦編『森銑三著作集』第三巻、中央公論社、一九八八年、二六二頁。
- (5) 柏崎順子「立原翠軒の門人岡野庄五郎宛書簡」『一橋論叢』一二五巻三号、二〇〇一年、二九七-三〇三頁。
- (6) 古画備考研究会編『原本『古画備考』のネットワーク』思文閣出版、二〇一三年、一〇-十一頁。
- (7) 大口理夫「思功供展画目録（校刊）」『画説』昭和十五年十月号、一九四〇年、四六二-四六六頁。
- (8) 宮武慶之「白醉庵・吉村観阿について」『日本研究』第五十四集、二〇一七年、三九-七七頁。
- (9) 『思功供展画目録』。東京都立中央図書館蔵。請求記号加賀文庫4405。  
寸法は縦一九・七センチ、横一二・二センチの小冊子。数カ所、所蔵者の名前が隠された箇所がある。本書では都立中央図書館本を底本とした。
- (10) 前掲注(9)。『思功供展画目録』。
- (11) 前掲注(7)。大口理夫「思功供展画目録（校刊）」、四六二-四六六頁。
- (12) 前掲注(7)。大口理夫「思功供展画目録（校刊）」、四六六頁。
- (13) 『一休禅師賛墨梅記』。東京大学史料編纂所蔵。請求記号溝口家史料-197。
- (14) 前掲注(13)。『一休禅師賛墨梅記』。
- (15) 『幽清館雑記』巻八。東京大学史料編纂所蔵。請求記号溝口家史料-325。
- (16) 前掲注(15)。『幽清館雑記』巻八。  
本稿では略したが、後半の記述は『思功供展画目録』の記述を写したものである。
- (17) 岡雅彦「江戸時代初期の一休墨跡資料(一)」『調査研究報告』第二〇号、国文学研究資料館文献資料部、一九九九年、四〇頁。
- (18) 溝口家の掛物の蔵帳である『御掛物帳』（新発田市立歴史図書館蔵）には所載を確認できない。
- (19) 玉蟲敏子『都市のなかの絵 酒井抱一の絵事とその遺響』星雲社、二〇〇四年、四九一頁より再引用。
- (20) 中野三敏、菊竹淳一共編『相見香雨集（四）』青裳堂書店、一九九六年、二八八-三〇一頁。
- (21) 前掲注(8)。宮武慶之「白醉庵・吉村観阿について」、四六-四八頁。
- (22) 前掲注(8)。宮武慶之「白醉庵・吉村観阿について」、四九-五〇頁。
- (23) 新発田市史編纂委員会編『新発田市史』上巻、新発田市、一九八〇年、六五九頁。
- (24) 熊倉功夫、原田茂弘校註『東都茶会記』近代茶会史料集成(二)、淡交社、一九八九年、四一〇-四一一頁。